

伴走支援官をご紹介します

眠っている資源に、可能性を感じました。

最上町を初めて訪れ、緑豊かな自然に囲まれた美しい町だと感じました。一方で、実際に町を歩く中で空き家や空き店舗も見受けられ、これらを地域活性化に活かせる可能性を感じました。最上町にはアスパラや温泉など魅力的な地域資源があり、ブランド化と情報発信によって大きな可能性を秘めていると思います。私たち支援官チームは、それぞれの経験や知見を生かし、行政だけではなく、町民の皆様と対話を重ねながら、最上町の未来づくりに伴走してまいります。



鈴木 清史 支援官

農林水産省 林野庁林政部
経営課 特用林産対策室長



地域の資源を、まちづくりへ。

最上町を訪問してみても第一印象は「静か」であること。人口減少が進んでいることを肌で感じた反面、豊かな自然、美味しい空気と水、新鮮な農産物、そして温泉があることは、町の大きな魅力だと思います。早くから取り組んでいる木質バイオマスなど、地域の資源を生かしたまちづくりを、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

町の魅力を、もっと多くの人へ。

新庄駅から最上町へ向かう道中、雄大な山々や美しい小国川に心を奪われました。自然や温泉など、最上町ならではの魅力がたくさんあると感じました。一方で、人口減少もあり、中心市街地は少し寂しいなと感じました。町のみなさんと一緒に課題に取り組み、最上町がもつ魅力を多くの方に発信できるよう考えていきたいと思っています。



渡邊 孝一郎 支援官

経済産業省 特許庁
総務部普及支援課
首席産業財産権専門官



伊東 舞子 支援官

厚生労働省 大臣官房
情報化担当参事官室 係長

最上町の未来と一緒に考えるため、国から3人の地方創生伴走支援官が着任しました。それぞれの専門分野の視点から、町職員や地域の皆さんとの対話を重ねながら、最上町らしいまちづくりを支援していきます。今回は、支援官の皆さんに最上町の第一印象や、これからの取り組みへの思いを伺いました。

町のこれからを、国の伴走支援チームとともに考える連載企画です。



伴走支援チームと考える、まちの暮らし

Vol.1

「町の魅力を、どう生かす？」

伴走支援制度とは？

伴走支援とは、国の職員が自治体と同じ目線で課題を考え、解決に向けて助言や意見交換を行う制度です。



対話・課題の整理

会議などで、課題や現状を共有。



現地訪問、意見交換

実際に町を歩き、地域の声を聞く。



方向性検討・助言

課題解決の方法と一緒に考える。

補助金を獲得するための制度でも、国が町の計画を決める制度でもありません。町が自ら考え、より良い未来を描くための「相談相手」として寄り添うことが、この制度の特徴です。

現地を歩き、町の声を知る



空き地から未来を考える



歩いて見える町の姿



地図を囲み意見を交わす

6月10～11日にかけて、支援官3名が当町へ来訪。町の状況把握や町の皆さんの声を確認し、今後の議論につなげていきます。

町はなぜ、「伴走支援制度」を活用したの？

最上町では今、人口減少や少子高齢化が進み、空き家や空き店舗の増加など、これまでにない課題に直面しています。一方で、町の人口や財政には限りがあり、すべてをこれまでと同じように維持していくことは難しくなっています。だからこそ町は、「何を残し、何を大切にしていくのか」を、改めて考える時期を迎えています。

そこで、町だけで答えを導き出すのではなく、全国でさまざまな地域づくりに携わる国の職員の知見を取り入れながら、町民や関係者との対話を重ね、一緒に考えるため、「地方創生伴走支援制度」を活用することにしました。今回は中心市街地をテーマに町内を歩き、地域の現状や課題を共有しながら、最上町らしいまちのあり方について検討を進めていきます。



全国115自治体から97自治体を選定

令和8年度の地方創生伴走支援制度には、全国115自治体から応募があり、その中から97自治体を選定されました。最上町もその一つとして、国の伴走支援チームによる支援を受けています。伴走支援では、各府省庁の本省職員で構成された2～3名のチームが、定期的なオンライン会議と現地訪問を重ねながら、課題を整理し、必要な情報や全国の事例を紹介するなど、それぞれの地域に合った支援を行います。また、国が一方的に答えを示すのではなく、自治体と同じ目線で考え、対話を重ねながら進めることが、この制度の大きな特徴です。



今後のスケジュール（予定）

現在
(オンライン会議)

オンラインで定期的な意見交換。課題整理や方向性の検討。



10月
(第2回目訪問)

第2回目の支援官訪問。各テーマごとの検討を深める。



冬頃
(検討・協議)

課題や方向性を整理。具体的な取り組みを検討。



令和9年2月頃

伴走支援の成果を整理。今後の方向性をまとめる。



答えは、町のどこかにあるのではなく、町で暮らす人たちの中にあります。支援官との取り組みを通して、これからも皆さんと一緒に考え、その歩みを広報もがみでお伝えしていきます。